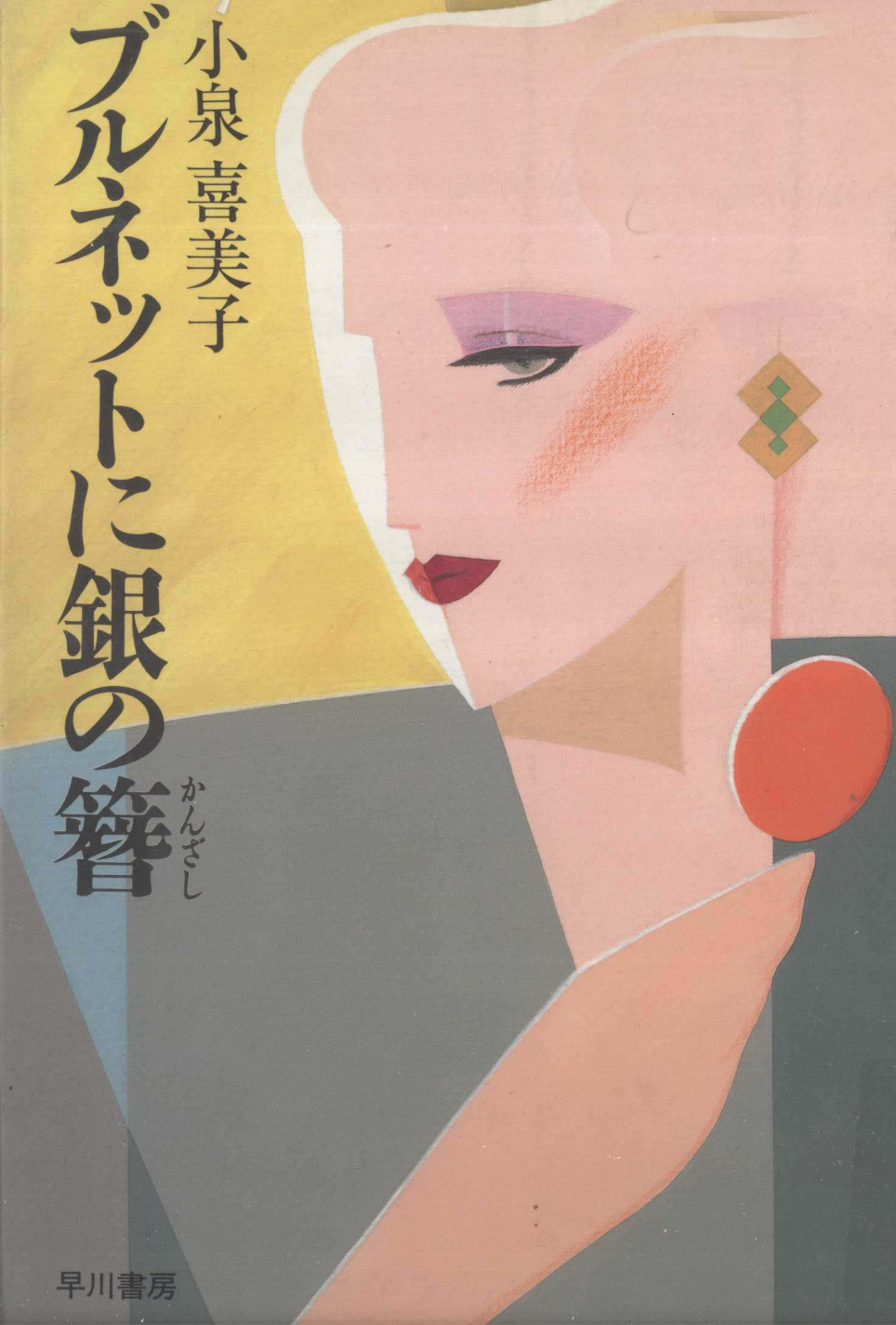
小泉喜美子

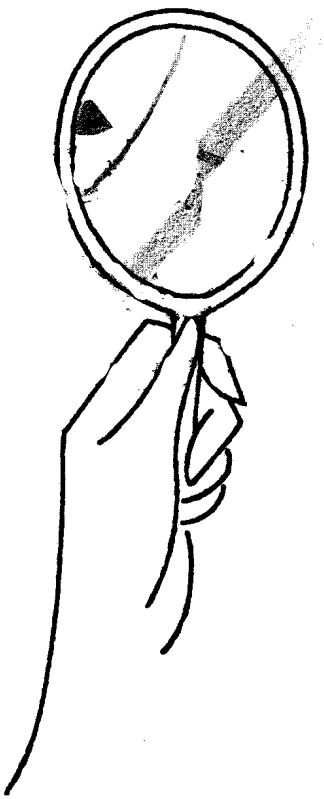
ブルネットに銀の簪（かんざし）



早川書房

ブルネットに銀の簪（かんざし）

氷喜美子



早川書房

検印廃止

ブルネットに銀の簪（かんざし）

昭和六十一年六月二十日　印刷
昭和六十一年六月三十日　発行

定価　一三〇〇円

著者　小泉喜美子（こいずみきみこ）

発行者　早川　清

発行所　株式会社　早川書房

郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話　東京(三五)三二一(大代表)
振替番号　東京・六―四七九九番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

印刷・信毎書籍印刷株式会社　製本・株式会社明光社

ISBN4-15-203311-8 C0095

ブルネットに銀の簪（かんざし）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

都会に会話あり

燭台　9

毛皮の魔力　13

女流作家の身のまわり　20

爪紅（つまべに）のこと　23

都会に会話あり　26

隣人たち　32

紅茶は粋か、野暮か　35

背のびした理屈より楽しい会話術を！　39

夏の曲　51

映画のなかのミステリアスな美女たち　56

酒のあやまち

つられそば　69

セルフ・コントロールということ　73

旅・芝居・酒　76

「ゆ」会のこと　80

酒のあやまち　85

酒中日記　90

女は何回勝負する　95

うじか花か　99

時によりけり　103

引っ越しさわぎ　107

やさしい人は悪い人

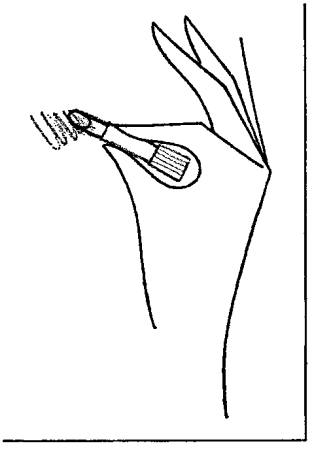
結婚の動機　113
梨園の妻たち　116
おとなのための恋愛作法　119
やさしい人は悪い人　130
殺される女の美学——小説と現実　140
前夫生島治郎氏への手紙——さらば、昔日のハードボイルド作家よ　153

新・花物語

一月は松——遠く、遙かな幸四郎　181
二月は梅——紅と白だけの男らしさよ　190
三月は桜——青空にシャンソンが流れる　198
四月は藤——お相撲さんの名は日本の美　206
五月はあやめ——絢爛たる文章とミステリー　213
六月は牡丹——誇り高き華やかさ　220

七月は萩――猪に代わって猫の話　230
八月は薄――浪花の月下で舌づつみ　238
九月は菊――女の知らない男の世界　246
十月は紅葉――日本は真紅で、西洋は黄金で　254
十一月は柳――都会の青春は映画と男友達　262
十二月は桐――葉が散る頃は人恋しい　270
晩夏の夕暮れに／落合恵子　279

都会に会話あり



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

燭台

世の中がこれほど便利になっても停電というのはいつあるかわからないから、懐中電灯とろうそくは常備品である。

懐中電灯のほうはいわゆる〝文明の利器〟なので、型や性能はどんどん変わってゆく。でも、ろうそくはちがう。

急場しのぎのろうそくをどこに立てても同じことかもしれないが、灰皿や空き罐ではいかにもあじけないし、また危険でもある。きちんとした燭台に立てるにしくはない。

だから、私はいいろうそくと燭台をぜひとも常備しておこうと思った。

大体、昔から燭台というものにあこがれていたのだ。ユーゴーの『レ・ミゼラブル』でジャン・バルジャンがミュリエル司教から盗んだ銀の燭台とまでさかのぼらずとも、幼い頃から燭台に興味を持った。

日本の家庭には燭台の贅沢をする伝統がない。江戸時代までは手燭から雪洞(ぼんぼり)、百匁ろうそく用の大

型のに至る各種類が揃っていたようだが、電灯が輸入されてのちはろうそくだけは非常用、もしくは神仏のお燈明用に残っても燭台はそれきりになった感がある。

燭台に対する私のあこがれは、ジャン・コクトーの『美女と野獣』を見るに及んでいっそう激しくなった。

あの映画のなかの、女主人公のベルが野獣の王の棲む怪奇な森の館(やかた)をおそるおそるとおとずれるシーンで使われていた燭台の美しさを忘れられない人も多いだろう。

一基の台から左右に何本もの枝が分かれて小さいろうそくがいくつもともせるかたちの、枝型燭台と呼ぶあれを持った腕が暗い壁のなかから音もなくさしのべられてずらりと並び、奥へ奥へとつづいて行くあの不気味な美しさといったらなかった。その下をベルが進んで行くのをすべるようなスローモーション・カメラで撮ったあのシーンは、今でも私の脳裏に豪奢な夢のように浮かんでくる。

それから、フランス・ミステリーでは私の一番好きなボワロー＝ナルスジャックの『死者の中から』の劇場のシーンの、

「幕が降りて、またあがった。吊燭台(リュストル)がきつい光を投げかけて、人々の顔を灰色っぽくした。みんな楽に拍手できるように立ちあがった。マドレーヌは彼女の夫が耳に囁きかけている間、プログラムを使ってゆっくり風を入れていた」

という描写も印象的だ。

そういうフランスの本場ものなどとても手が届かなかったが、スペイン製の鉄のを見つけて買った。素朴――というよりは稚拙といったほうがいいくらいのごく荒っぽい細工である。ずっしりと重く

て凶器にはもってこいだが、これを振りかざして相手の頭をぶち割るには相当の腕力とタイミングが要求されるだろう。

私はむしろ、これにつけられていたろうそくに魅せられたのだ。青とも緑ともつかぬ珍しい微妙な色合いをしていた。買ったのが十数年前なので、今はだいぶくろずんでいる。そして、この太さがいい。

スペインではどこにでも売られているのかもしれない。さして珍しがるほどのことはないのかもしれないけれども、私はこの青いろうそくに没薬や蜜蠟やその他さまざまの不可思議な原料を溶かしこんで拵えたその昔のムーアやアラビアのろうそくの面影を重ねて楽しむ。

何も停電のときと限らず、このろうそくの焔が恋しくなると、私は部屋の電灯をぜんぶ消してこれに火をつける。

大人の二の腕ほどもある青緑の蠟の柱のまんなかにぽーっと黄色の焔が立ち、そのまわりが仄かな黄色に染まる。そして、その下の真っ黒な鉄細工の台はいつまでもじっと無言でそれを支えつづける、武骨で忠実な下僕のようだ。

普通のろうそくのように蠟が外側にぽたぽた垂れないのも気に入っている。蠟は内側へ内側へと静かに燃えて、くぼんで行く。少しもよごれない。

ただし、あの蠟涙というのも私は嫌いではない。銀の燭台にそれこそマリア様の涙のようなあれがしたたり流れ落ちて白くかたまったのが聖壇に飾ってあるのは気分が出る。

でも、私の部屋はそういうロマンチックな宗教画のようなのとは大ちがいだし、貴族の食卓に出す

華麗なのも似合わないから、このスペインの田舎の手造りらしいごつごつした黒い鉄と青い太い素朴なろうそくの黄色い焔がふさわしいのである。

毛皮の魔力

ずっと昔は、毛皮のコートを着ている女というのはよほどの貴婦人か金持か、さもなくば娼婦だった。

ごく普通の生活をしている奥さんや娘さんがへそくりだのローンだので毛皮を買ってどんどん着て歩くことは二十年ぐらい前の日本ではとても考えられなかった。

毛皮にあこがれるどころか、高嶺の花という気持のほうが強かった。私など、毛皮のコートやストールはもっぱら外国ミステリーや外国映画のなかで鑑賞していたものだ。

ミステリーと毛皮についてはもう二度ほど書いてしまったので省略する。最高傑作を一つだけ挙げておく。コーネル・ウールリッチの『殺人数学』という短篇で、殺された女の銀狐のケープについていた自動車のタイヤの跡が完全犯罪を阻止する話である。

外国映画のほうはこれはもう百花繚爛だ。題名だけで思い出したって、『ミンクの手ざわり』『貂の毛皮の女』なんてすぐに出てくる。前者はドリス・デイとケーリィ・グラント主演の都会コメディ。

後者はベティ・グレイブル主演のミュージカルだが、日本では封切られていない。

私の記憶する限り、貴婦人ないし有閑婦人の毛皮の着こなしとして最上の一つだったのは、ジュリアン・デュヴィヴィエ監督がアメリカで作った『運命の饗宴』（原題名『マンハッタン物語』）というオムニバス映画の第二話でジンジャー・ロジャースとゲイル・パトリックのそれであった。

娼婦のほうは、ロバート・ジオドマク監督のギャング物『都会の叫び』に登場したシェリィ・ウインタース扮する売春婦が羽織ったのがじつにもって娼婦の生活そのものだった。彼女は『ポセイドン・アドヴェンチャー』でぶくぶくふとった晩年の姿をさらしていたが、若き日は冷たいあばずれ女を演らせたら相当のものだった。

さて、ここにこういう文章を引用させていただこう。

昔、妻に貂の毛皮のコートを着せてみようと思ったことがある。妻の知人がインドで貂の毛皮を仕入れてきてコートを作ったそれがなかなか素敵にみえたのである。値段は三十万円ということであった。

しかし、いざとなると今度は本人が尻込みしてこれは幸いにもお流れになった。幸いにというのは、つまり倹約になったという意味ではない。その後二人でパリへ行った時、フォーブール・サン・トノレをぶらぶらしていると毛皮屋に貂のコートが出ていたのである。これはショックであった。

私は毛皮のことなどなにも知らぬが、一目でこいつは最上の貂だということがわかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com